岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 185

田井ちご池遺跡

勝央調整池築造工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査

２００４

岡山県広域水道企業団
岡山県教育委員会

遺跡上空から美野平野を望む（南から）

序

岡山県広域水道企業団は、広域交通網の整備によって西日本の新しい中核拠点として発展している岡山県の将来の水需要に対し、水質・水量共に安定した水道用水を広域的に供給するための事業を進めています。

本県の東北部に位置する勝央町、奈義町及び勝北町は、従来から水源の確保に苦慮しており、工業団地の水需要の増加、水源となっている小規模ダムの水質悪化、さらには、下水道の整備等により今後も水需要の増加が見込まれることから、平成14年度に当企業団に参画されました。

本企業団では、３団体からの早期供給開始の要望に応えるため参画決定と同時に事業に着手し、平成17年度からの供給開始を目標に施設整備を推進しています。

今回の発掘調査対象地は、勝央町の供給地点であると同時に3,000㎥の貯水が可能な勝央調整池の計画敷地であり、この計画敷地内が、周知の埋蔵文化財包蔵地「間山（はしたやま）高福寺跡」に該当することから、発掘調査を岡山県教育委員会に委託しました。

その結果、弥生時代の竪穴住居や縄文時代の落し穴と考えられる遺構が発見され、さらに、間山高福寺に関連する遺物が出土するなど、間山山上における人々の活動の歴史を考える上で貴重な資料を得ることができました。

本書はこれらの発掘調査の記録であり、これが埋蔵文化財に対する認識と理解を深めるとともに、学術・文化等のために広く活用されることを期待します。

最後に、この発掘調査ならびに本書の編集にあたられた岡山県教育委員会をはじめとする関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成16年３月

岡山県広域水道企業団
事務局長　犬　飼　忠　男

序

勝央町と美作町にまたがる間山（はしたやま）、その山麓や周辺には、数多くの弥生時代の集落や大小さまざまな古墳が知られ、古代の官衙や寺院跡もあります。また、山中にも勝田焼窯跡が各所に認められ、山頂には経塚や林野の安養寺会陽発祥の地と言われる間山高福寺跡も所在します。近年のこの周辺の発掘調査では、平地よりずいぶん高い位置に立地する弥生時代の集落が確認され、注目を集めています。

この間山の最高所に勝央調整池の建設が計画され、その対象地は古代寺院「間山高福寺跡」と山上の弥生時代集落「田井ちご池遺跡」の一角にあたります。そこで、この周知の埋蔵文化財の保護・保存につきまして、関係諸機関で協議を重ねてまいりましたが、最終的には、やむなく記録保存の措置を執ることになった次第です。

発掘調査の結果、弥生時代の竪穴住居以外にも、さらに古い縄文時代の落し穴と考えられる遺構が見つかり、間山山上での人々の活動の歴史が縄文時代にまで遡ることが判明しています。また、高福寺に関連する時代の遺物も出土し、今後の歴史研究を進めていくうえでの新たな資料を追加することができました。

これらの調査成果をまとめた本書が、埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに、教育・学術のために広く活用されるよう願うところです。

また、発掘調査ならびに報告書作成にあたりましては、岡山県広域水道企業団をはじめ、勝央町水道局、同教育委員会の関係各位、ならびに地元の方々に温かい御理解と多大な御協力を賜りました。記して厚くお礼申し上げます。

平成16年３月

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　正　岡　睦　夫

例　言

1　本書は、岡山県教育委員会が勝央調整池築造工事に伴い、岡山県広域水道企業団と岡山県の委託契約に基づき実施した、田井ちご池遺跡の発掘調査報告書である。契約事項は文化財課が行い、発掘調査および報告書作成は岡山県古代吉備文化財センターが担当した。

2　当調査地は、周知の遺跡包蔵地「間山高福寺跡」の範囲内にあたり、勝央町教育委員会の実施した確認調査で弥生時代後期の竪穴住居が検出されている。そのため、西に隣接する弥生時代後期の集落「田井ちご池遺跡」が当調査地まで延びていると判断し、遺跡名を「田井ちご池遺跡」と変更した。なお、平成12年度にふるさと農道緊急整備事業に伴い調査を実施した田井ちご池遺跡「東・西区」（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告171）と区別するため、当調査地を「調整池調査区」と呼称する。

3　田井ちご池遺跡（調整池調査区）は、勝田郡勝央町田井字ちご池956-3他に所在する。

4　発掘調査は、平成15年度に物部茂樹・蛯原啓介が担当して実施した。面積は1,578㎡である。

5　本書の作成は、平成15年度に実施し、物部が担当した。

6　執筆・編集は物部が行った。なお、第１章第１節「調査に至る経緯」の確認調査に至る経緯と確認調査の概要の記載は、勝央町教育委員会團正雄氏の御教示による。

7　遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助を得た。

8　本書に関連する出土遺物および図面・写真・マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

凡　例

1　本書に用いた高度値は海抜高であり、方位は平面直角座標第Ⅴ系の座標北である。また、遺構配置図等の座標値および抄録に記載した経緯度は、世界測地系に準拠している。

2　本書記載の遺構・遺物の図には個別にその縮尺率を記しているが、基本的には次のとおり統一している。

　　竪穴住居：１／60　　土壙：１／30

　　土器・陶磁器・瓦：１／４　　石器・石製品：１／２・１／３

3　遺構配置図等において遺構番号を付す場合、つぎの略号を使用している。

　　竪穴住居：**住**　　方形竪穴住居状遺構：**方**　　土壙：**土**

4　遺物番号は土器・陶磁器にはそのまま番号だけを付け、瓦には**R**、土製品には**C**、石器・石材には**S**を番号の前に付けている。

5　本書に記載した土器のうち中軸線の両側に白抜きのあるものは、小片のため径が不確実なものである。

6　一覧表における遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準拠している。そのほか、本文中の遺物および土層の色調は調査担当者の記述による。

7　第３図は、国土地理院発行の１/50,000地形図「津山東部」を複製・加筆したものである。

8　本書における時期区分は、一般的な政治史区分に準拠している。

目　次

巻頭カラー図版
序
例言
凡例
目次
第１章　調査に至る経緯と調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査および報告書作成の経過 …… 1
　第３節　調査および報告書作成の体制 …… 2
　第４節　日誌抄 …… 2
第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
第３章　調査の概要 …… 5
　第１節　調査区の概要 …… 5
　第２節　遺構・遺物 …… 7
　　1　概要 …… 7
　　2　竪穴住居 …… 8
　　3　土壙 …… 11
　　4　遺構に伴わない遺物 …… 13
第４章　まとめ …… 15
写真図版
抄録

図　目　次

第１図　遺跡の位置（1/2,000,000）…… 1
第２図　確認調査全体図（1/1,000）…… 1
第３図　周辺の主要遺跡（1/50,000）…… 4
第４図　調査区の位置（1/5,000）…… 5
第５図　調査後の地形（1/600）・基本層序
　（縦1/100、横1/400）…… 6
第６図　遺構の配置（1/400）…… 7
第７図　竪穴住居 炭化材検出状況（1/60）…… 8
第８図　竪穴住居（1/60）…… 9
第９図　竪穴住居 柱穴断面（1/60）…… 10
第10図　竪穴住居 出土遺物（1/4・1/3・1/2）
　…… 10
第11図　土壙１～６（1/30）…… 11
第12図　土壙７（1/30）・出土遺物（1/2）…… 12

第13図　土壙８～11（1/30）…… 13
第14図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/3・1/2）
…… 14
第15図　田井ちご池遺跡の弥生時代遺構配置
（1/5,000）…… 15
第16図　経文復元 …… 15

表　目　次

第１表　土壙一覧表 …… 16
第２表　瓦観察表 …… 16
第３表　土製品観察表 …… 16
第４表　石器観察表 …… 16

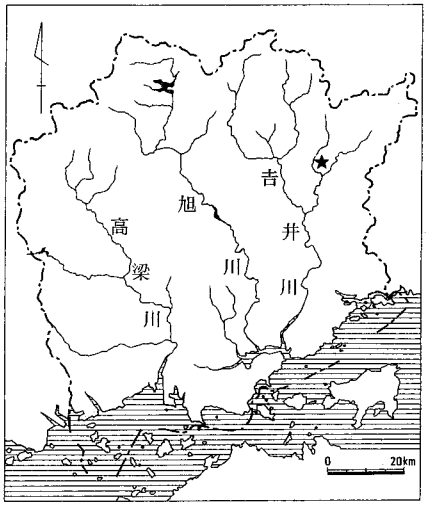
図　版　目　次

巻頭カラー図版　遺跡上空から美野平野を望む
（南から）
図版１－１　遺跡上空から勝間田平野を望む
（北から）
２　遠景（南から）
図版２－１　竪穴住居（南東から）
２　竪穴住居 炭化材出土状況（北から）
図版３－１　竪穴住居 中央穴（北から）
２　竪穴住居 中央穴土層（北から）
３　竪穴住居Ｐ６柱痕（南西から）
４　竪穴住居Ｐ６土層（西から）
５　竪穴住居Ｐ７柱痕（南西から）
６　竪穴住居Ｐ７土層（北東から）
７　竪穴住居 高床部（北東から）
８　竪穴住居 高床部断面（北西から）
図版４－１　土壙１（南西から）
２　土壙２（東から）
３　土壙４（南東から）
図版５－１　土壙５（北東から）
２　土壙７（南東から）
３　土壙８土層（南西から）
図版６－１　土壙８（南西から）
２　土壙９（南から）
３　土壙10（北西から）
図版７－１　竪穴住居 出土土器
２　石器
３　転用砥石
４　瓦経
図版８－１　勝間田焼
２　備前焼
３　瓦

第１章　調査に至る経緯と調査の経過

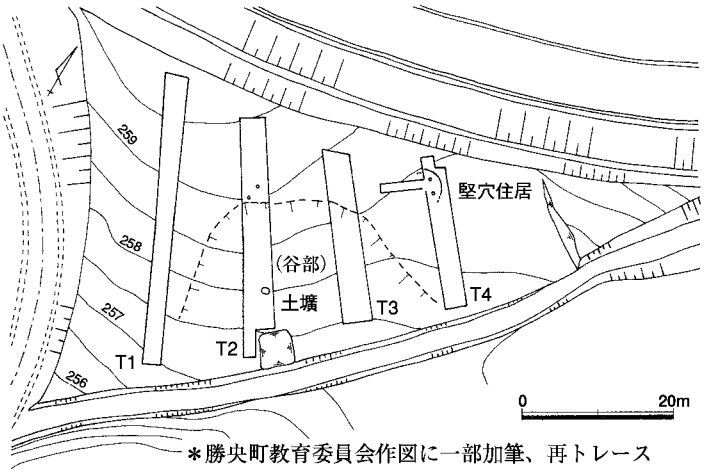
第１節　調査に至る経緯

平成14年11月、岡山県広域水道企業団（以下、企業団）から勝央町間山地内に計画している調整池築造工事予定地の文化財の有無について、勝央町教育委員会に対して照会がなされた。これに対し、同町教育委員会は工事予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地「間山高福寺跡」に該当することから、遺跡の取り扱いについて協議を行うよう指導した。これを受け、平成15年１月、勝央町水道課、同教育委員会、企業団の三者による協議がもたれ、確認調査を実施し、その調査結果をもとに別途協議することで合意した。同年７月に勝央町教育委員会を主体として確認調査が実施された。



第１図　遺跡の位置（1/2,000,000）

確認調査の結果、予定地は近年の畑地造成により、丘陵頂部の削平と谷部の埋め立てなど、地形がかなり改変されている状況が見られたが、弥生時代の竪穴住居等や須恵器、勝間田焼の破片が検出されたことから、予定地内に弥生時代の集落と古代末から中世にかけての遺構が存在する可能性が考えられた。



第２図　確認調査全体図（1/1,000）

この結果に基づき、岡山県教育庁文化財課（以下、文化財課）は全面調査の必要があると判断し、同年８月に企業団、勝央町教育委員会、文化財課、岡山県古代吉備文化財センター（以下、センター）で協議を行った。協議の結果、企業団は岡山県と発掘調査の委託契約を締結し、同年11・12月に発掘調査、平成16年１～３月に報告書の作成を行うこととした。

第２節　調査および報告書作成の経過

全面調査は、平成15年11・12月に、センター職員２名が担当し実施した。表土、造成土、旧表土を重機で除去し、その後人力で清掃、検出、遺構調査を行った。途中、調査区のすぐ北側を走るふるさ

と農道の開通にあたり、ダンプによる排土の持ち出しが遅れ、１週間ほど作業員による発掘作業を中断したが、発掘調査は予定どおり12月26日をもって終了した。

報告書作成は、調査に引き続き、平成16年１月～３月にセンターにおいて職員１名で実施した。

第３節　調査および報告書作成の体制

岡山県教育委員会

教 育 長　宮野　正司

岡山県教育庁

教育次長　三浦　一男

文化財課

課　　長　西山　　猛

課長代理　田村　啓介

課長補佐（埋蔵文化財係長）　平井　泰男

文化財保護主任　尾上　元規

主　　事　浜原　浩司

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　正岡　睦夫

次　　長　藤川　洋二

文化財保護参事　松本　和男

<総務課>

課　　長　中田　哲雄

課長補佐（総務係長）　笏本　弘忠

主　　任　小坂　文男

<調査第三課>

課　　長　柳瀬　昭彦

課長補佐（第二係長）　下澤　公明

文化財保護主任　物部　茂樹（調査・報告書担当）

文化財保護主事　蛯原　啓介（調査担当）

発掘調査・報告書作成協力者・機関

間壁忠彦（倉敷考古館）　妹尾　護（倉敷芸術科学大学）　團　正雄（勝央町教育委員会）

美作町歴史資料館

第４節　日誌抄

平成15年（2003年）11月４日　重機による調査区東半部表土除去開始。発掘調査開始。

７日　重機による東半部表土除去終了。

10日　地形測量。基準杭設置。

12日　発掘資材搬入。作業員による発掘作業開始。

28日　排土持ち出しの遅れにより作業員による発掘作業一時中断。

12月８日　作業員による発掘作業再開。

17日　ラジコンヘリによる空中撮影。

18日　発掘資材搬出。

19日　実測補足。

26日　発掘調査終了。

平成16年（2004年）１月５日　報告書作成開始。

３月31日　報告書作成終了。

第２章　遺跡の位置と環境

田井ちご池遺跡の所在する勝田郡勝央町は、中国山脈と吉備高原に挟まれた県北最大の津山盆地の東部に位置する。町の北西部には、那岐山塊南麓の日本原台地やそこから南方へ延びる幾筋もの丘陵尾根の先端部が及び、町の南半部は第三紀層や古・中生層の丘陵が占める。その中を、那岐山山塊の滝山に端を発する滝川と後山山塊に源を発する梶並川の両者がともに南流し、標高260mの間山の北側に美野、南西側に勝間田、南東側に豊国の盆地状の谷底平野を発達させている。

間山周辺における最古の遺跡は、今のところ縄文時代早期の楕円押型文土器が採集された金鶏塚遺跡に始まる。また、縄文時代と思われる落し穴が虫尾遺跡・大年古墳群の下層で検出されている。

弥生時代前期の遺跡は今のところ見つかっていないが、中・後期になると遺跡数が急増する。美野平野では、北縁の低丘陵上に弥平治遺跡をはじめ多数の集落・散布地が所在し、南縁の間山北麓にも能部遺跡・清實遺跡などが点在する。勝間田平野では、北縁の間山南麓に小中遺跡などの大規模な集落が立地し、南縁の低丘陵上には国司尾・天神遺跡などがある。豊国平野の周縁にも北山古墳群下層や鎌倉山遺跡、丸山遺跡が位置し、各平野ごとに周囲の低丘陵上に集落が営まれている状況がある。一方、間山では、山頂に田井ちご池遺跡や、わずかに下った丘陵高所に田井たれをず遺跡、岡東高塚遺跡が調査され、山上の集落として注目される。また、念仏塚遺跡で袈裟襷文銅鐸が出土している。

古墳時代になると、多くの前方後円・後方墳が登場する。前期の古墳は、美野平野周辺では植月寺山・美野中塚・西宮神社裏・田井高塚・美野高塚古墳の前方後方墳が知られる。また、勝間田平野を見下ろす間山南麓には琴平山・殿塚・岡高塚古墳などが、豊国平野を望む丘陵上には楢原寺山古墳や金焼山１号墳が占地する。中期の古墳は、鉄製農耕具や竪櫛を副葬していた落山古墳がある。国司尾・天神遺跡では初期須恵器を副葬した土壙墓が検出され、渡来文化に関わりを持つ被葬者像が浮かび上がる。後期には、今まで古墳の築かれなかった丘陵部や谷筋の奥にも古墳群や群集墳が出現する。一方、この時代の集落では、勝央中核工業団地内遺跡第Ⅶ調査区の古墳時代初頭の集落、弥平治遺跡の６世紀初め頃の集落などがあり、そのほか、鉄滓や鞴の羽口が出土した７世紀の鍛冶集落福吉丸山遺跡や竪穴住居の埋土中から多量の鉄滓・炉壁片が出土した上相遺跡など、製鉄関連の遺跡も多い。

古代は、勝間田平野の東部に勝田郡衙関連遺跡に比定されている平遺跡・勝間田遺跡が所在し、小中遺跡には奈良時代の倉庫と推定される掘立柱建物群がある。また、楢原平野北東部には白鳳時代に楢原廃寺が、間山山頂には古代に間山興福寺が建立されている。さらに勝間田平野近辺では、須恵器窯跡や横口付炭窯等も知られる。この時期の遺物は、豊久田で発見されたと伝えられる人面墨書土師器や、それに宇津木谷須恵器窯跡から出土した陶馬などが留意される。

古代末から中世にかけては、勝間田平野の南北両側の山中を中心にして、戸岩窯跡や進上谷窯跡などの約50基の勝間田焼窯跡が存在し、県南の備前焼や亀山焼と並ぶ中世須恵器の生産地となっている。また、高福寺の所在する間山山頂周辺は、瓦経を納めた経塚が知られ、鳥取県倉吉市大日寺瓦経との関連から、11世紀末頃に造られたと考えられている。一方、美野平野では広く条里遺構が遺存し、部分的な調査で条里地割りが中世まで遡ることが確認されている。

以上、この章は、光永真一編「田井ちご池遺跡ほか」『県調査報告』171を基調にして書き改めた。

1	田井ちご池遺跡	12	田井たれをず遺跡	23	よつみ凡２号墳	33	上相遺跡
2	金鶏塚遺跡	13	岡東高塚遺跡	24	上相中塚５号墳	34	平遺跡
3	虫尾遺跡	14	念仏塚遺跡	25	楢原寺山古墳	35	勝間田遺跡
4	大年古墳群	15	植月寺山古墳	26	金焼山１号墳	36	楢原廃寺
5	弥平治遺跡	16	美野中塚古墳	27	上経塚古墳群	37	間山高福寺跡
6	能部遺跡	17	西宮神社裏山古墳	28	落山古墳	38	宇津木谷窯跡
7	清實遺跡	18	田井高塚古墳	29	国司尾遺跡	39	勝央中核工業団地内遺跡
8	小中遺跡	19	美野高塚古墳	30	天神遺跡		第Ⅵ調査区
9	北山古墳群	20	琴平山古墳	31	勝央中核工業団地内	40	戸岩窯跡
10	鎌倉山遺跡	21	殿塚古墳		遺跡第Ⅶ調査区	41	進上谷窯跡
11	丸山遺跡	22	岡高塚古墳	32	福吉丸山遺跡	42	美野条里遺構

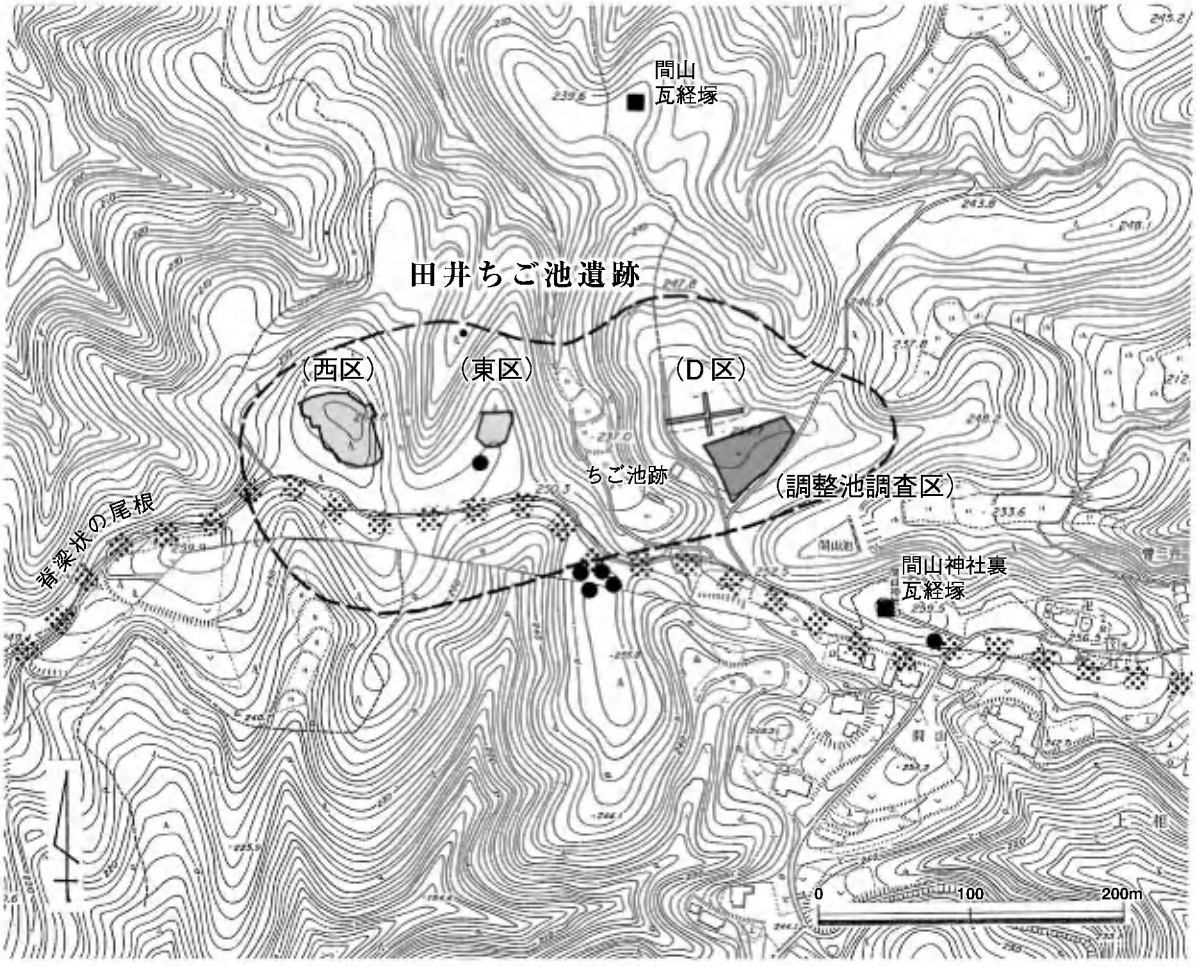
第３図　周辺の主要遺跡（1/50,000）

第３章　調査の概要

第１節　調査区の概要

間山山塊のほぼ中央やや南寄りに、標高260m前後の小さな峰々が東西方向に約1.5kmにわたって連続する。その東部に田井ちご池遺跡は所在する。この遺跡は、平成10～13年度にふるさと農道緊急整備事業に伴う確認・発掘調査（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告171』）が実施されている。そこでは「西区」、「東区」が調査され、弥生時代後期後半を中心とする集落を検出している。今回の調査地点でも弥生時代後期の竪穴住居１軒が確認され、集落がこの調査地まで延びていると判断し、田井ちご池遺跡「調整池調査区」として報告する。

田井ちご池遺跡一帯は、古代寺院と推定される間山高福寺跡に比定されている。間山瓦経塚は古くからよく知られているが、間山神社社殿の下からも瓦経が出土する。また、古墓と考えられる土まんじゅう状の盛り土も点在し、その中には周囲に溝を巡らすものもある。

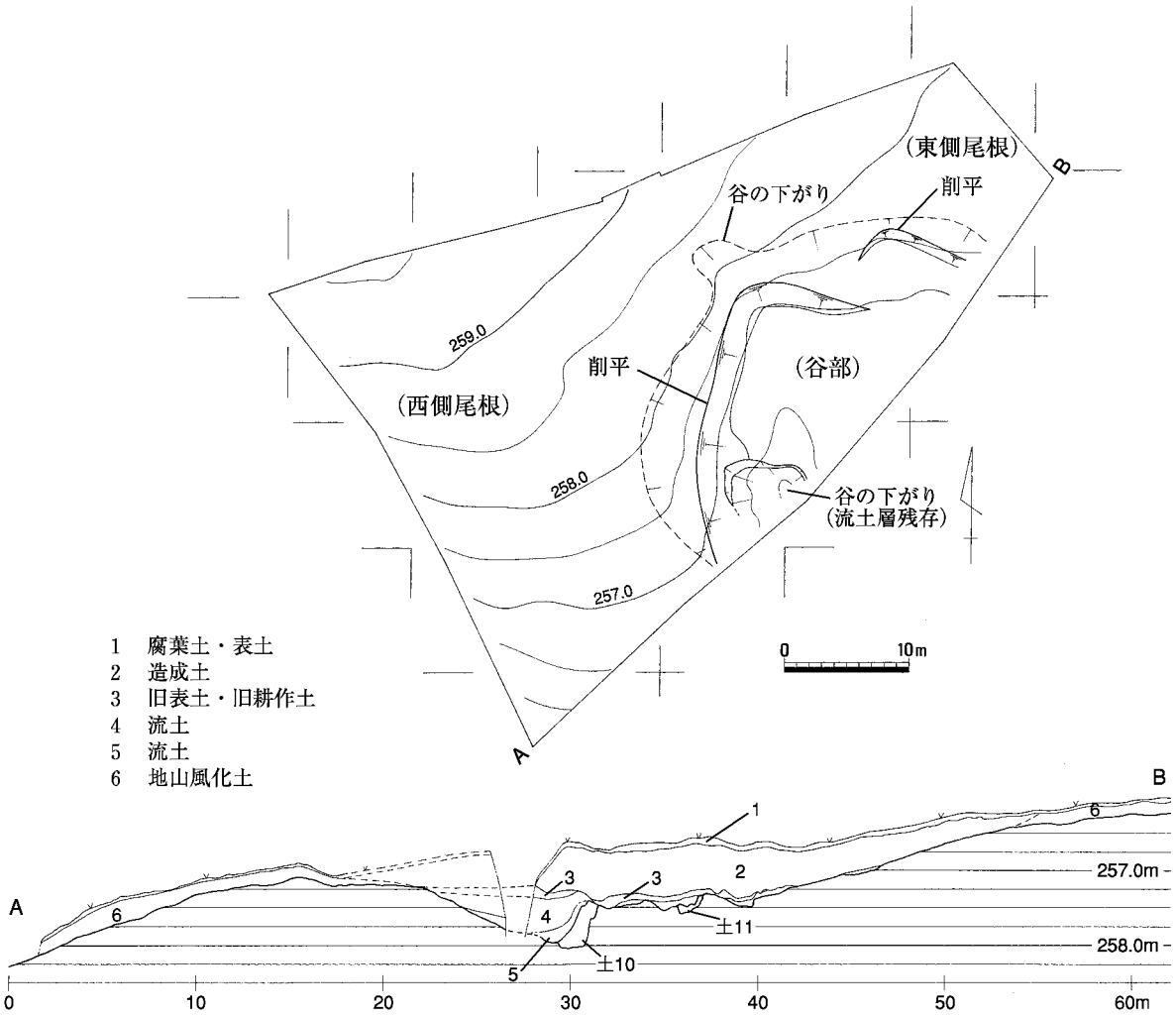


※黒丸は古墓あるいは経塚の可能性のあるもの

第４図　調査区の位置（1/5,000）

調整池調査区は尾根頂上部南東側緩斜面に位置し、東区の位置する尾根との間には、小字名の由来となった「ちご池」跡のある深い谷がはいる。西区と東区の間にも谷が入り込んでいるが、地形的に見ると、各調査区を設定した各尾根はすぐ南側で東西方向に延びる脊梁状の尾根と接続し、谷もこの尾根によって解消される。言い換えると東西方向の尾根を脊梁として、南北両方向へ尾根と谷が派生していく地形であり、各調査区を設定した尾根頂上部はこの脊梁尾根を通じて繋がっている。

調整池調査区のすぐ北側の頂上部分には確認調査（Ｄ区）がはいっており、近年の畑地造成による地形改変が確認されている。今回の調査では、調査区の中央から始まり南東方向に深くなる谷部を検出した。この谷は、やがて東側下方の間山池（通称はす池）のある谷へと繋がっていくと考えられる。谷部には厚いところで60cmの赤い地山土の造成土が認められ、これは調査区北の頂上部分を地山ごと削平し、谷部を埋め立てたものと推定される。その造成土の下にはやや粘性を帯びた灰色土がある。この土は、近所の方の「しる田があった」という話から、旧耕作土と推定される。また、谷部には人為的な段が２か所あり、田圃を開削する際に斜面を削り込んだものと考えられる。旧耕作土の下には、その削平をまぬがれた流土層が谷中央部分にわずかに認められる。この流土層は上・下層に分層されるが、時期差はなく、出土した備前焼の特徴から15世紀以降に形成されたものと考えられる。谷部を挟んで東西両側の尾根上では、表土下はすぐ地山となる。地山の上部は風化が進み、黄褐色土のなかに地山が小塊となって残っている状況であり、遺構はこの風化土を基盤とし、検出は難しい。



第５図　調査後の地形（1/600）・基本層序（縦1/100、横1/400）

第２節　遺構・遺物

１　概 要

検出された遺構は、弥生時代後期後～末葉の竪穴住居１軒、柱穴状の小穴３個、中世土壙１基、時期不明土壙10基である。時期不明土壙10基のうち７基はその形態から縄文時代の落し穴と推定される。その埋土は周囲の地山風化土が流入したものと思われ、黒ボクと称される火山性の酸性土壌層は見られない。もっとも、ふるさと農道工事関係者の話によると間山の丘陵地一帯にも黒ボクは確認されないそうである。

出土遺物は概して少なく、全体で整理箱２箱である。その大半は谷部に残存する流土層から検出された。備前焼、勝間田焼、土師質土器、布目瓦が少量と瓦経が１片、弥生土器片１片が出土した。15世紀以降に形成された流土層と考えられる。

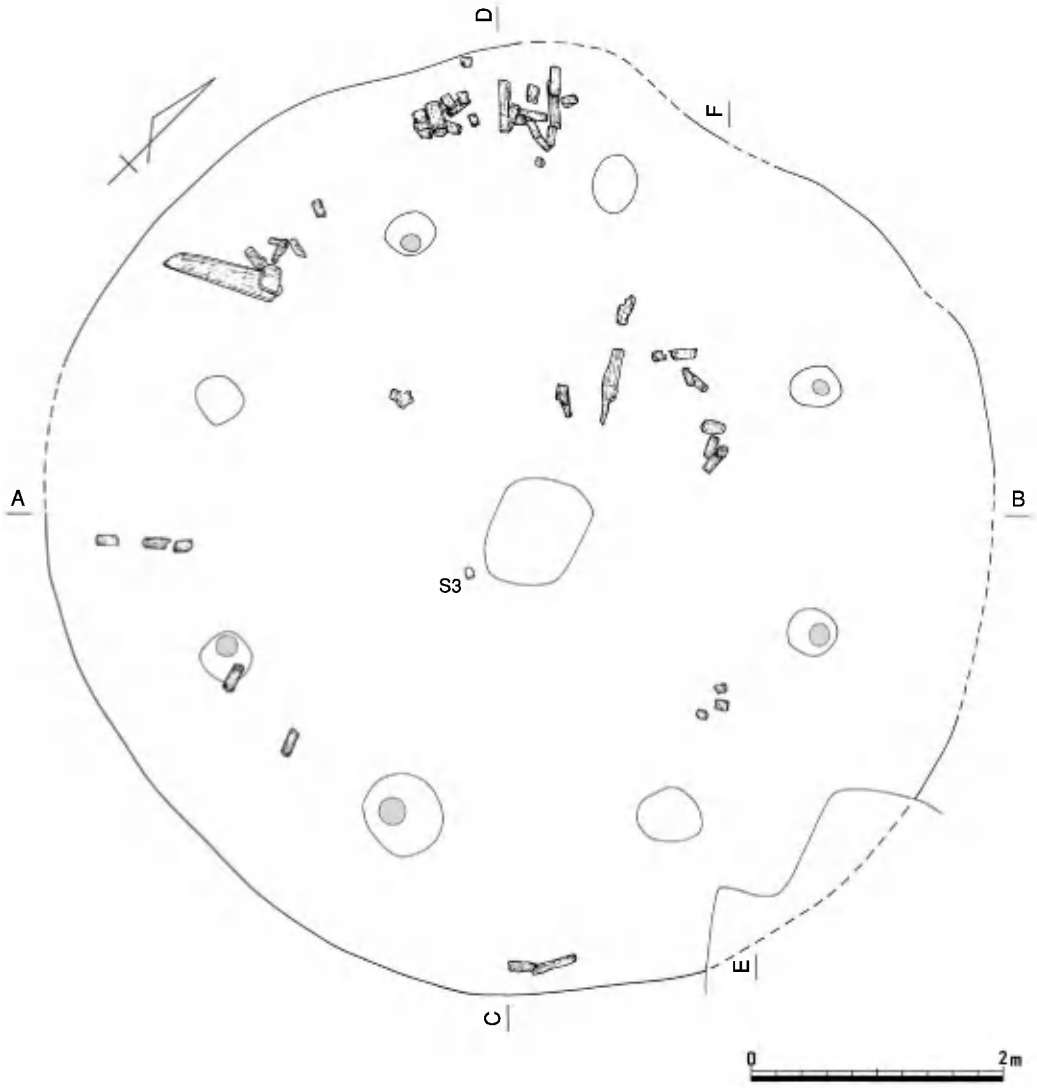
＊（　）の数値は日本測値

第６図　遺構の配置（1/400）

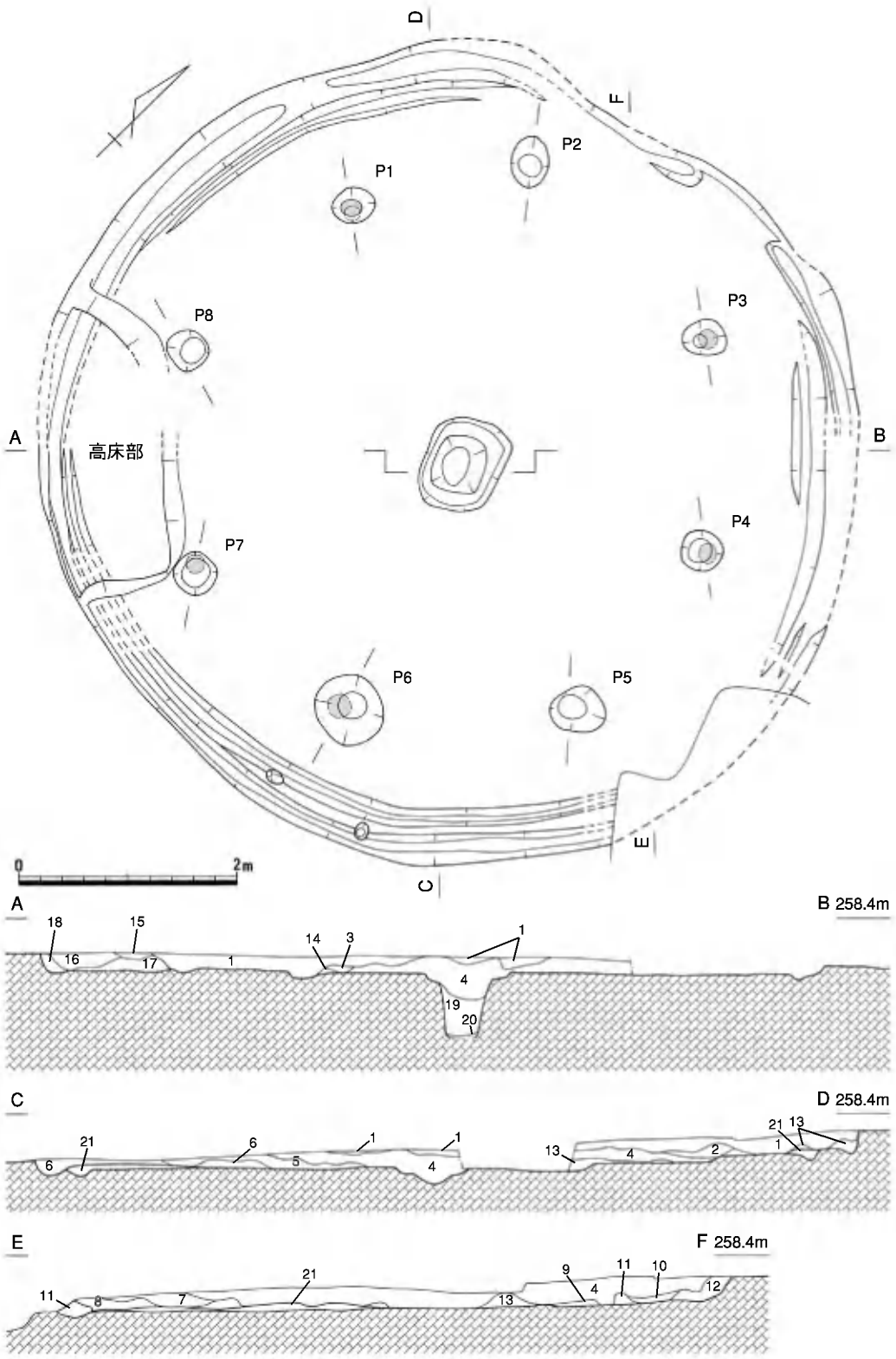
2　竪穴住居

竪穴住居（第６～10図、図版２・３）

竪穴住居は、谷部東側の尾根が谷側に向けて緩やかに下降する緩斜面部に位置する。平面形は直径約7.5mの円形を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。壁沿いには壁体溝があり、８個の主柱穴、方形で二段堀状の中央穴を検出した。主柱穴はほぼ２m間隔で並び、中央穴からの距離も2.5m前後で等しい。ただし、Ｐ２のみ若干ずれる。中央穴は床面からの深さ約60cmを測り、非常に深く、埋土には炭粒が僅かに混じる程度で炭層は無い。遺存状況は良くないが炭化材が検出され、焼失住居と考えられる。炭化材の多くは壁面から直角に竪穴住居中央へ向かう丸太材が多く、垂木と想定できる。主柱穴のうちＰ１・３・４・６・７には明瞭な柱痕が確認でき、焼失時、主柱は立ったままであったと推定できる。また、竪穴住居南東部のＰ７とＰ８の間から壁にかけて、長軸2.7m、短軸1.2m、遺存高15cmの長方形の高床部を検出した。この高床部は地山削り出しではなく、地山小塊を多く含む褐色土でできており、周囲の焼土粒・炭粒を含む竪穴住居埋土とは容易に識別できた。また、壁沿いの断面土層では壁体溝埋土上に高床部の置き土が載っていることから、壁体設置後に高床部が作られた

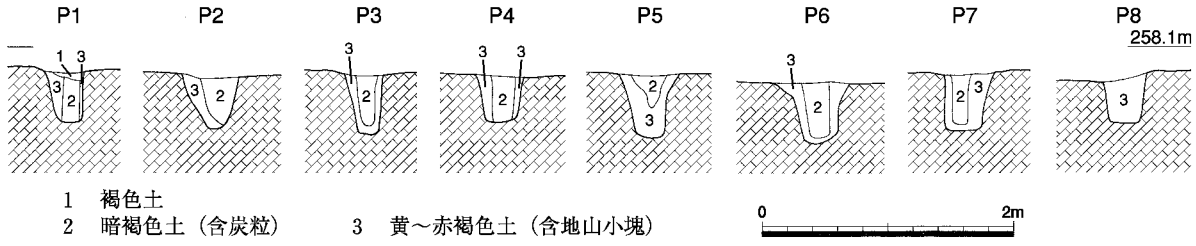


第７図　竪穴住居 炭化材検出状況（1/60）



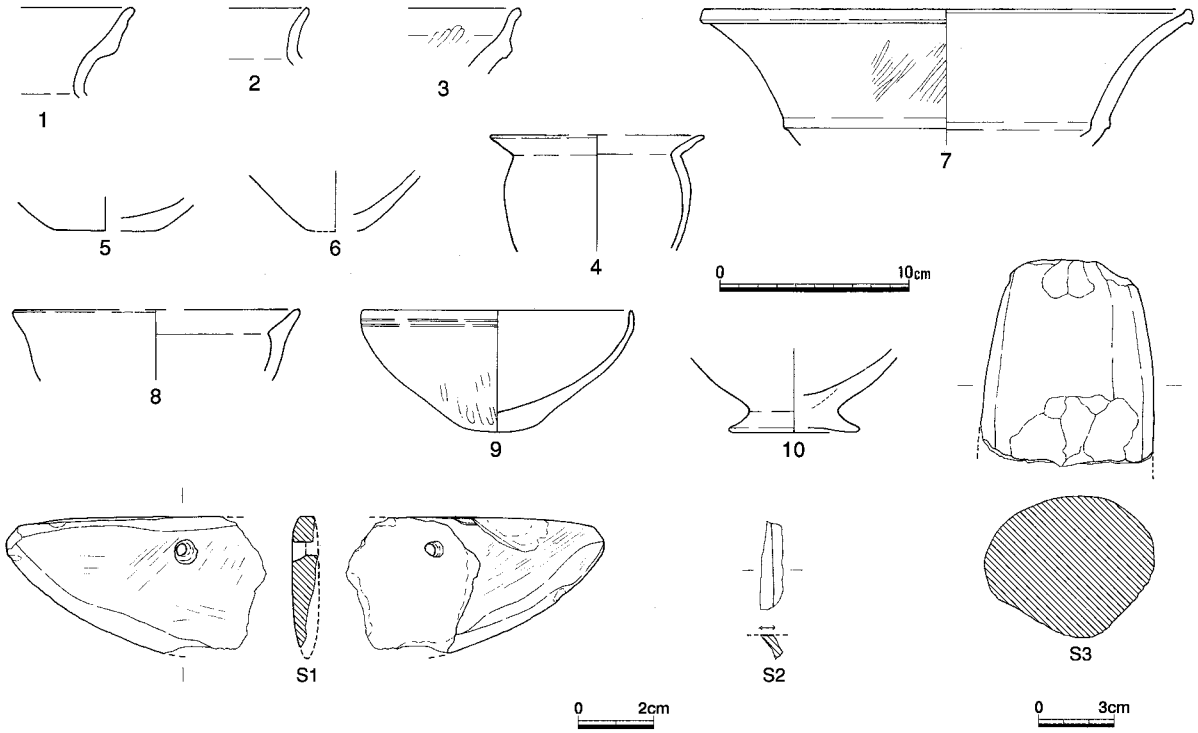
1　褐色土
（含焼土粒・炭粒・地山小塊）
2　褐色土
3　暗褐色土（灰集中）
4　褐色土（含焼土粒・地山小塊）
5　暗褐色土（含多炭粒）
6　赤褐色土（含多焼土粒）
7　暗褐色土（含炭粒・地山小塊）
8　褐色土
（含焼土塊・炭粒・地山小塊）
9　暗黄褐色土
10　褐色土
11　地山小塊
12　褐色土（含炭片）
13　暗褐色土（含多炭片・炭粒）
14　地山小塊
15　黄褐色土〈高床部〉
16　黄褐色土（含多地山小塊）
〈高床部〉
17　赤褐色土〈高床部〉
18　暗褐色土（含炭粒・地山小塊）
19　暗黄褐色土（含僅炭粒）〈中央穴〉
20　灰褐色土〈中央穴〉
21　黄褐色土〈古階段の竪穴住居〉

第８図　竪穴住居（1/60）



第９図　竪穴住居 柱穴断面（1/60）

と推定できる。津山市竹ノ下遺跡２区の後期後葉の２号住居址（『津山市調査報告』第11集 1982年）に同様なものが見られる。古墳時代前期を中心に方形竪穴住居に検出されるベット状遺構とも呼ばれる高床施設の一形態と解釈したいが、その性格は定かでない。床面には壁体溝がもう一条検出され、竪穴住居の拡張が行われたことを物語っているが、主柱穴に切り合いは確認できず、柱はそのまま使用したものと思われる。遺物は土器小片約150片と石器がある。すべて埋土中から出土した。１は壺、２は直口壺か。３は甕、４は「く」の字口縁の甕か鉢。５・６は鉢か甕。８～10は鉢。７は中央穴埋土上部から出土した。口縁部は外湾し長く延び、鼓形器台にも似るが、杯部は内湾気味で口縁部との境に明瞭な段をもつことから高杯と考えられる。ただ、上下に短く拡張する口縁端部は珍しい。勝央町岡の小中遺跡の弥生時代後期竪穴住居61（『県調査報告』117　1997年）に類例がある。Ｓ１はホルンフェルス製石包丁、Ｓ２は頁岩製砥石、Ｓ３は斑れい岩製太型蛤刃石斧である。ちなみに、西区・東区の竪穴住居および方形竪穴住居状遺構から出土した砥石はすべて頁岩製である。竪穴住居の時期は壺・甕の口縁部形状から弥生時代後期後葉～末葉と推定される。なお、焼失住居において貯蔵してあった穀物類（米・大豆・小豆等）が炭化し遺存している例が増加していることを受け、床面付近の炭粒を土ごと土嚢袋10袋に採取し、水洗・選別したが、穀物類は検出されなかった。



第10図　竪穴住居 出土遺物（1/4・1/3・1/2）

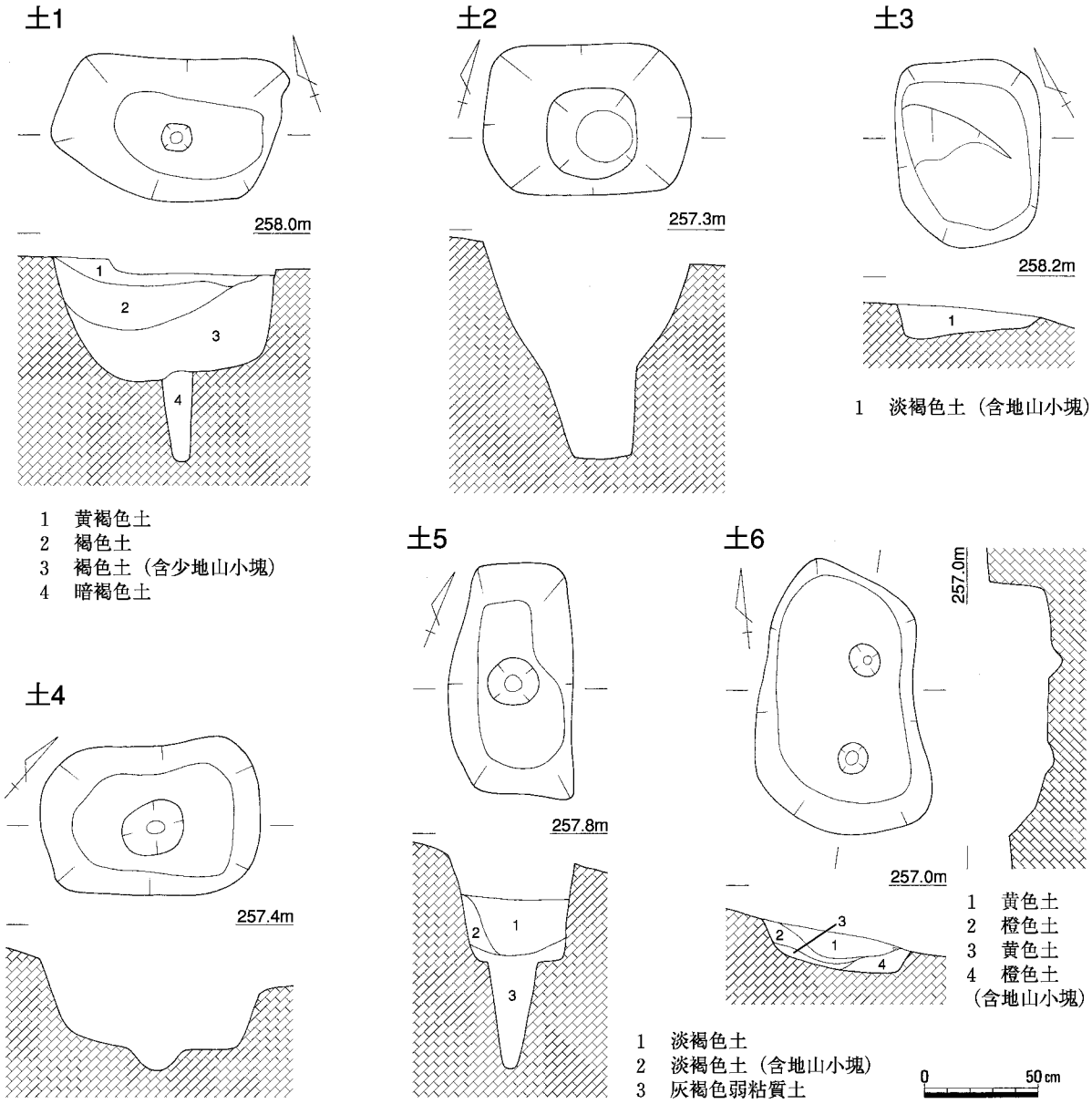
３　土 壙

土壙１（第６・11図、図版４－１）

土壙１は谷部北側の緩斜面に位置し、竪穴住居によって上部を削平されている。平面形は約100×60cmの長方形を呈し、検出面からの深さは約50cmを測る。底面中央には深さ約40cmの小穴がある。埋土中位で土器細片１点を検出した。黒っぽい色調で胎土には砂粒が多い。土壙１は形態から縄文時代の落し穴と考えられる。埋土は地山風化土の流入層で黒ボク層は見られない。

土壙２（第６・11図、図版４－２）

土壙２は谷部北側の緩斜面に位置する。平面形は約90cm×65cmの長方形を呈す。検出面からの深さは約90cm。二段に掘り込まれ、底面は平らで径25cm程度の円形になる。埋土は一様な褐色土で、下部はグライ化する。遺物は無いが、埋土と深さから縄文時代の落し穴の可能性がある。



第11図　土壙１～６（1/30）

土壙３（第６・11図）

土壙３は谷部北西側の緩斜面に位置する。深さは14cmほどで浅く、底面は段差がある。時期不明。

土壙４（第６・11図、図版４－３）

土壙４は谷部北西側の緩斜面に位置する。後世谷部の削平により土壙上部が削られていると考えられる。平面形は95×65cm程の長方形を呈す。底面中央に浅い窪みがある。縄文時代の落し穴か。

土壙５（第６・11図、図版５－１）

土壙５は谷部西側の緩斜面に位置する。平面形は約100×55cmの長方形を呈し、底面中央に深さ50cm近いピットがある。埋土は下層はグライ化する。その形態から縄文時代の落し穴と考えられる。

土壙６（第６・11図）

土壙６は谷部西側の緩斜面に位置する。平面形は約120×70cmの長方形状を呈し、底面に２か所の浅い窪みがある。遺物は無く、時期不明だが、形態と埋土から縄文時代の落し穴の可能性がある。

土壙７（第６・12図、図版５－２）

土壙７は谷部西側の尾根上に位置する。平面形は約125×80cmの長方形を呈し、検出面からの深さは約90cmを測る。底面中央に深さ約50cmの小穴がある。埋土下層はグライ化する。遺物には、埋土中からサヌカイトと考えられる剥片**Ｓ４～７**が出土した。いずれも白っぽく風化しており、**Ｓ４**には人為的な剥離面が見られる。土壙７は形態から縄文時代の落し穴と考えられる。

土壙８（第６・13図、図版５－３・６－１）

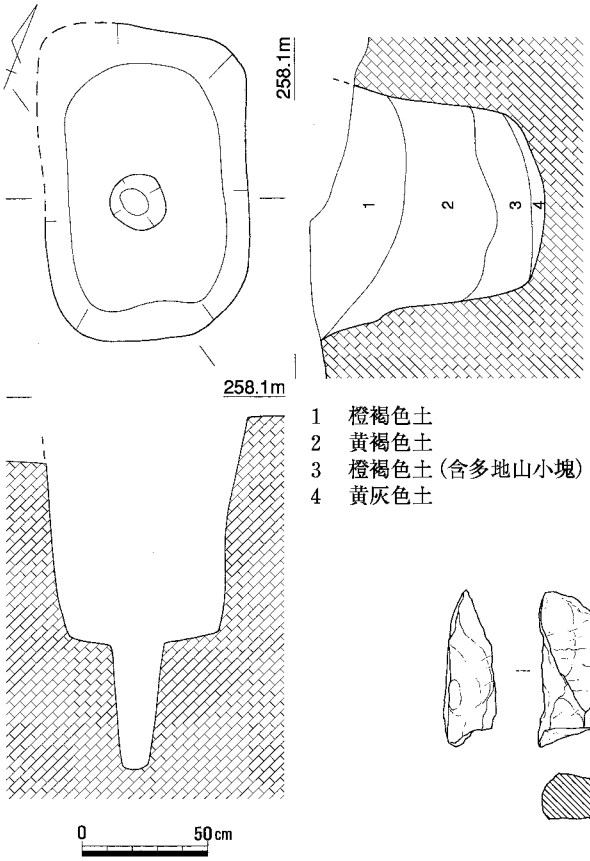
土壙８は西側尾根の西側緩斜面に位置する。平面形は約125×70cmの長方形を呈し、検出面からの深さは約１ｍを測る。底面中央に深さ約45cmの小穴がある。埋土はほぼ一様な褐色土で下層はグライ化する。遺物はないが形態から土壙８は縄文時代の落し穴と考えられる。

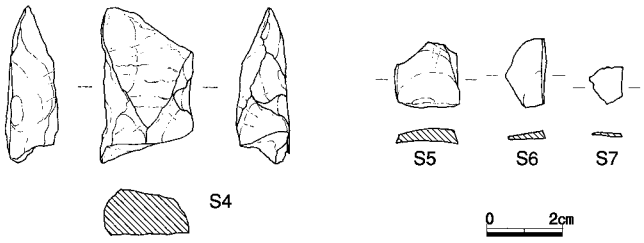
土壙９（第６・13図、図版６－２）

土壙９は西側尾根の西側緩斜面に位置する。平面形は約80cm四方の方形を呈し、検出面からの深さは約30cmを測る。底面に角礫が１個検出されたが、伴うかどうかは不明。時期不明。

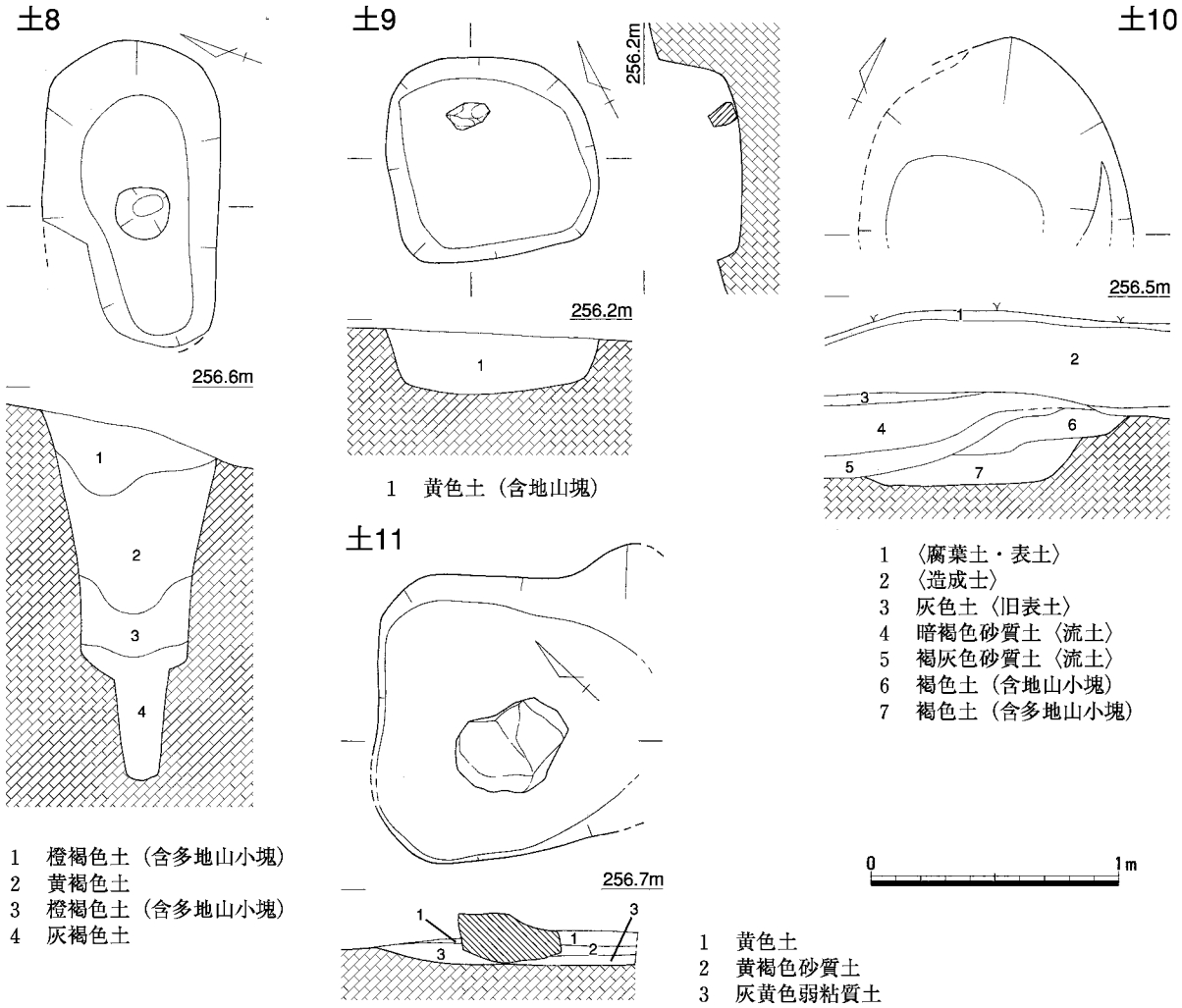
土壙10（第６・13図、図版６－３）

土壙９は谷部に位置する。谷部最下層の中世流土層に土壙西側上部を削られて





第12図　土壙７（1/30）・出土遺物（1/2）



第13図　土壙８～11（1/30）

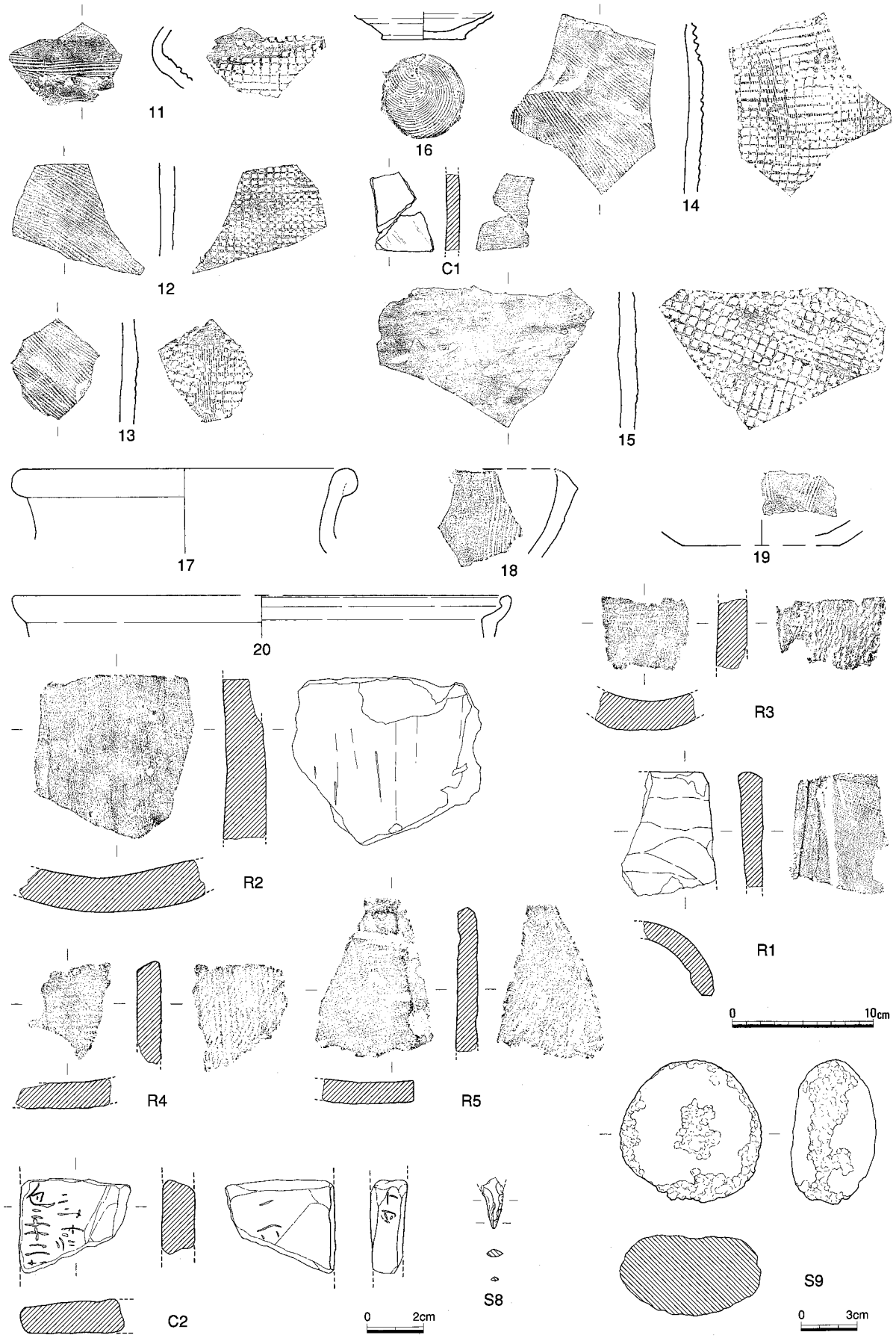
いる。埋土は地山小塊を多く含む褐色土で、出土遺物はなく、時期は中世以前である。

土壙11（第６・13図）

土壙11は谷部に位置する。中央に大きな角礫が検出された。埋土は砂っぽく流入土と思われる。埋土中から須恵質の土器細片が出土し、時期は中世と考えられる。

４　遺構に伴わない遺物（第14図）

表土と谷部下層の流土中から出土したもので、その量は整理箱１箱強と少なく、破片ばかりである。石錐Ｓ８、敲石Ｓ９は表土から、勝間田焼11～16、備前焼壺17、擂鉢18・19、土師質土器鍋20、布目瓦Ｒ１～Ｒ５、瓦経Ｃ２は流土から出土した。勝間田焼は甕が多く26片、ほか壺２片、椀３片である。焼成良好で褐色を呈するものもある。甕片は外面が格子目タタキで、内面がハケメとナデの２種類ある。Ｃ１は内外ハケメの勝間田焼甕転用品で外面が極度に研磨され、砥石として使用されたと考えられる。瓦は計７片で、凹面布目、凸面縄目と板ナデの２種類ある。また、灰色と白～橙色のものがあり、後者は特に磨滅が著しい。瓦経はＣ２の１点のみ。上下と側面の片方を欠損している。厚さは1.0～1.2cm。胎土は精良、表面は磨滅が著しく、白っぽい色調であるが、経文の刻まれた部分は黒灰色なので、元々表面は黒灰色だったと思われる。「三十二」が明瞭である。側面は「四」か。



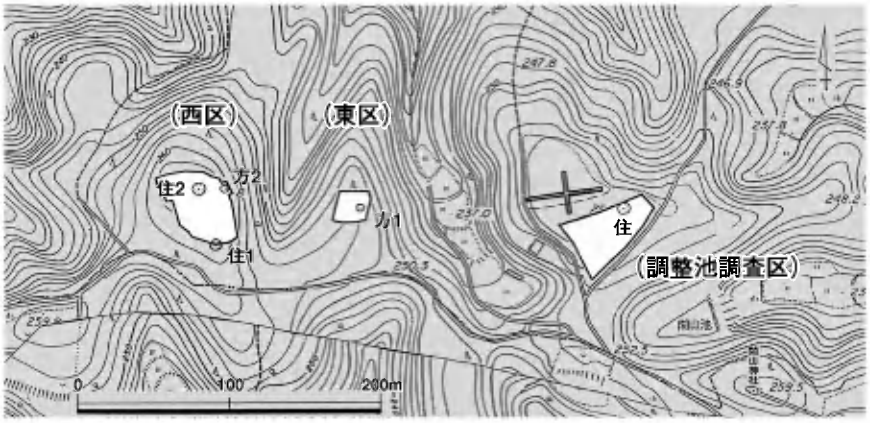
第14図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/3・1/2）

第4章　まとめ

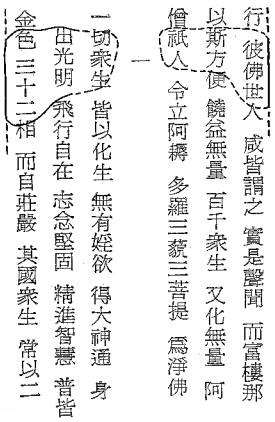
調整池調査区で確認した土壙１・２・４～８の７基は、土壙の形態から縄文時代の落し穴と想定される。落し穴の立地は間山の最高所で谷頭を望む丘陵頂部である。形態は３種類あり、深さ40～50cmの小穴が１つあるもの４基と、浅い窪みをもつもの２基、断面が徐々にすぼまるもの１基である。土壙７出土のサヌカイトと考えられる剝片は、近くで石器を製作したか補修したことを推定できる。

弥生時代の遺構は竪穴住居１軒にとどまった。谷部の埋め立て土は調査区北側の頂部削平土と推定される。その埋め立て土中から遺物の出土は無く、下層の流土中にも僅かに１片の弥生土器しか検出されなかったことは、尾根頂部に遺構はあっても少なかったと想像させる。調査区東側へは尾根平坦面が山道を越えて30mほど延び、この部分に遺構が載る可能性はある。西区の竪穴住居１・２と方形竪穴住居状遺構２の時期は後期後半で、すべて焼失していることなどから同時併存の可能性が指摘されている。東区の方形竪穴住居状遺構１と土壙２基も後期後半の範疇でとらえられている。西区の遺構出土の壺・甕は、口縁端部が短く上方へつまみ出すものが主体となるのに対し、調整池調査区竪穴住居出土の壺・甕がともに上方へ長く拡張するものであることから、後者がより新しい様相をもっており、西区から調整池調査区への移住を想定したい。高杯**7**は前述したように小中遺跡に類例が認められるが、津山市上部遺跡ＳＤ105出土土器のなかにも小片ながら同様の高杯口縁部があり、これは弥生時代終末の土器のなかにある。高杯**7**を県南で一般的な高杯の流れで捉えるか、装飾高杯の退化形態と捉えるか、山陰の鼓型器台の影響か、今後の課題としたい。田井ちご池遺跡の弥生時代後期集落は、間山北側の美野平野と120m、南側の勝間田平野とは160mの比高差があり、かなり高所に立地しているが、遺物においては特殊な性格を付与するものは見られない。

流土出土の古代～中世の遺物に、瓦や勝間田焼がみられることから調査区北の頂部に高福寺関連の施設が存在した可能性もあるが、摩滅したものが多く、個数も少量であることから、なお不明と言わざるを得ない。瓦経**Ｃ２**は間山瓦経の破片が移動したものと考えられる。経文「三十二」およびその上下の文字の痕跡などからこの瓦経は『法華経』巻４の２枚目にあたり、「三十二」はその裏面最終行（10行目）としてよさそうである。また、小口にみられる文字の痕跡の下側は「四」と思われ、丁付の可能性が大きい。



第15図　田井ちご池遺跡の弥生時代遺構配置（1/5,000）



第16図　経文復元

参考文献

稲田孝司「西日本の縄文時代落し穴猟」『論苑考古学』坪井清足さんの古希を祝う会 1993年
光永真一ほか「田井ちご池遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』171 岡山県教育委員会 2003年
安川豊史「上部遺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第30集 津山市教育委員会 1990年
間壁忠彦「美作間山瓦経」『古文化談叢』第30集（上）九州古文化研究会 1993

瓦経および経文の同定について、倉敷考古館長間壁忠彦氏に大変有益な御教授を頂いた。記して感謝の意を表す次第である。

第１表　土壙一覧表

掲載番号	立地	平面形	検出面での規模（cm）			小穴	小穴の規模（cm）		遺物	時期	備考
			長径	短径	深さ		直径	深さ			
土壙１	谷部北側緩斜面	長方形	100	62	53	１個	14	39	土器細片１点	縄文時代	
土壙２	谷部北側緩斜面	長方形	90	65	90	－				(縄文時代)	
土壙３	谷部北西側緩斜面	長方形	82	63	14	－					
土壙４	谷部北西側緩斜面	長方形	95	65	39	１個	26	9		(縄文時代)	上部削平
土壙５	谷部西側緩斜面	長方形	100	55	46	１個	22	47		縄文時代	
土壙６	谷部西側緩斜面	長方形状	120	70	23	２個	14	3～6		(縄文時代)	
土壙７	西側尾根上	長方形	125	80	90	１個	22	50	サヌカイト剥片４点	縄文時代	
土壙８	西側尾根西側緩斜面	長方形	125	72	105	１個	21	45		縄文時代	
土壙９	西側尾根西側緩斜面	正方形	84	82	33	－					角礫１個
土壙10	谷部	楕円形？	111	80以上	30	－					
土壙11	谷部	方形？	115	100以上	14	－			須恵質の土器細片１点	中世	

第２表　瓦観察表

掲載番号	遺構・土層名	器種	計測値cm（残存値）			色調	胎土	焼成	凹面（１cm角の糸数）	凸面	状態	備考
			長さ	幅	厚さ							
Ｒ１	谷部流土下層	丸瓦	(8.7)	(7.7)	1.7	オリーブ灰色(2.5GY6/1)	１mm以下の砂粒	良好	布目（９×10）	強いナデ	小片	
Ｒ２	谷部流土下層	平瓦	(11.9)	(13.45)	3.2	灰色(7.5Y6/1)	３mm以下の砂粒	良好	布目（７×８）	ｹｽﾞﾘのちﾅﾃﾞ	小片	
Ｒ３	谷部流土上層	平瓦	(7.5)	(5.8)	2.3	灰白色(N7/)	６mm以下の砂粒	良好	布目（７×９）	縄目	小片	磨滅
Ｒ４	谷部流土上層	平瓦	(7.9)	(7.0)	2.0	灰色(N6/)	５mm以下の砂粒	良好	布目（６×７）	縄目	小片	磨滅
Ｒ５	谷部流土上層	平瓦	(10.2)	(7.4)	1.5	浅黄橙色(10YR8/4)	３mm以下の砂粒	良好	布目（８×　）	縄目	小片	磨滅

第３表　土製品観察表

掲載番号	遺構・土層名	器種	計測値mm（残存値）			重量(g)	色調	胎土	焼成	状態	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚							
Ｃ１	谷部流土下層	勝間田焼転用砥石？	(5.7)	(4.5)	1.0	26.04	灰色(7.5Y5/1)	１mm以下の砂粒	良好	破片	古代末～中世	内外とも比較的幅の狭いハケメ調整の勝間田焼と考えられる甕片を転用。片面が非常にツルツルしており、研ぎ面として使用されている。砥石か？
Ｃ２	谷部流土上層	瓦経	(3.34)	(3.95)	1.2	14.95	灰白色(2.5Y8/2)	1.5mm以下の砂粒	良好	破片	古代末～中世	磨滅が著しい。罫線無し。「三十二」が読める。側面には「四」丁付か？『法華経』巻４の２枚目の破片と推定。

第４表　石器観察表

掲載番号	遺構・土層名	器種	計測値mm（残存値）			重量(g)	色調	石材	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚					
Ｓ１	竪穴住居	磨製石包丁	(68.0)	(36.0)	(8.4)	20.41	黒色(2.5GY2/1)	ホルンフェルス	弥生時代後期後～末葉	欠損、両面穿孔
Ｓ２	竪穴住居下半	砥石	(23)	(6)	(6)	0.89	灰色(7.5Y5/1)	頁岩	弥生時代後期後～末葉	欠損
Ｓ３	竪穴住居床近く	磨製太型蛤刃石斧	(82.0)	(69.0)	(56.6)	473.98	緑灰色(5G5/1)	斑れい岩	弥生時代後期後～末葉	欠損
Ｓ４	土壙７	剥片	41.0	24.7	13.8	14.62	灰白色(10Y7/)	サヌカイトか	縄文時代	加工痕あり
Ｓ５	土壙７	剥片	17.5	17.5	3	1.36	灰白色(10Y7/)	サヌカイトか	縄文時代	
Ｓ６	土壙７	剥片	18	11	2	0.47	灰白色(10Y7/)	サヌカイトか	縄文時代	
Ｓ７	土壙７	剥片	10	9	1	0.08	灰白色(10Y7/)	サヌカイトか	縄文時代	
Ｓ８	表土	石錐	(18.0)	(8.0)	(2.7)	0.31	灰色(10Y5/1)	流紋岩か	弥生時代か	欠損
Ｓ９	表土	敲石	757	76	44.4	321.23	浅黄橙色(10YR8/3)	粗粒花崗岩	弥生時代か	完形

1　遺跡上空から
勝間田平野を望む
（北から）

2　遠景（南から）

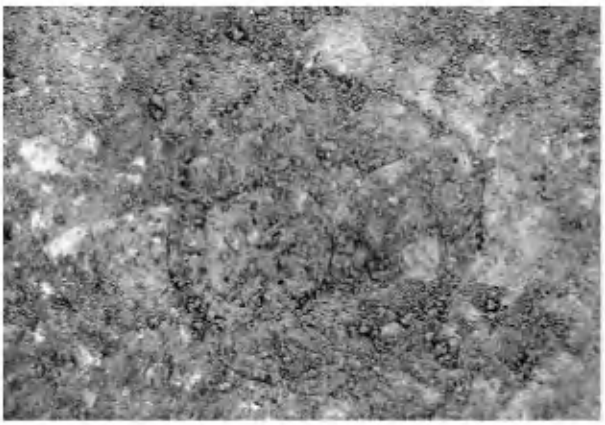
図版 2

1　竪穴住居（南東から）

2　竪穴住居 炭化材出土状況（北から）

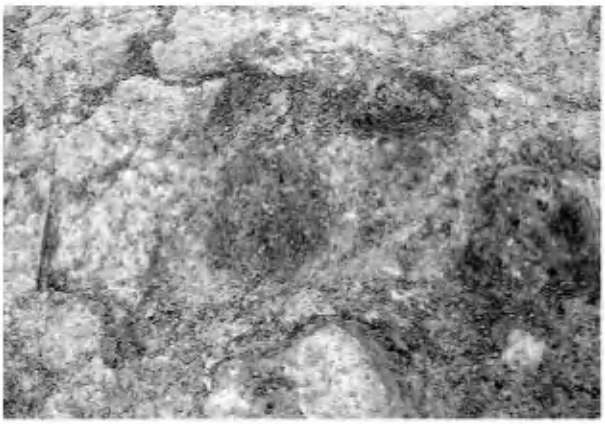
1　竪穴住居 中央穴（北から）

2　竪穴住居 中央穴土層（北から）



3　竪穴住居P６柱痕（南西から）

4　竪穴住居P６土層（西から）



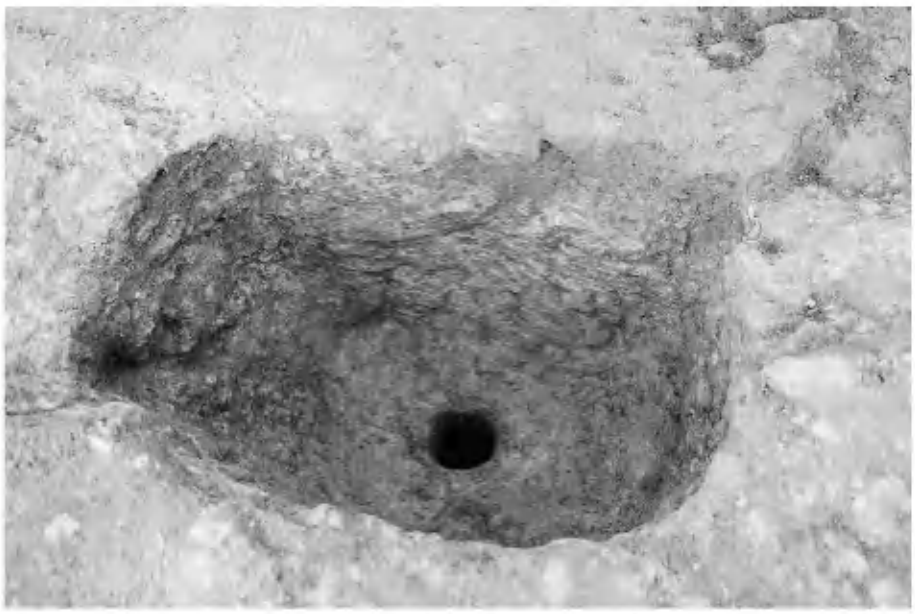
5　竪穴住居P７柱痕（南西から）

6　竪穴住居P７土層（北東から）

7　竪穴住居 高床部（北東から）

8　竪穴住居 高床部断面（北西から）

図版 4



1　土壙 1（南西から）

2　土壙 2（東から）

3　土壙 4（南東から）

1　土壙 5（北東から）

2　土壙 7（南東から）

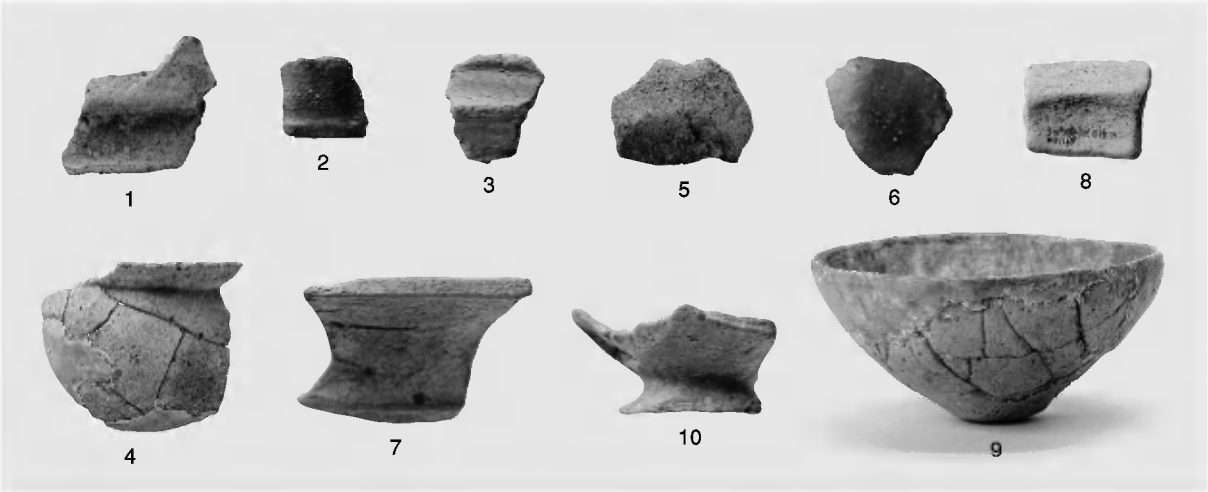
3　土壙 8 土層
（南西から）

図版 6

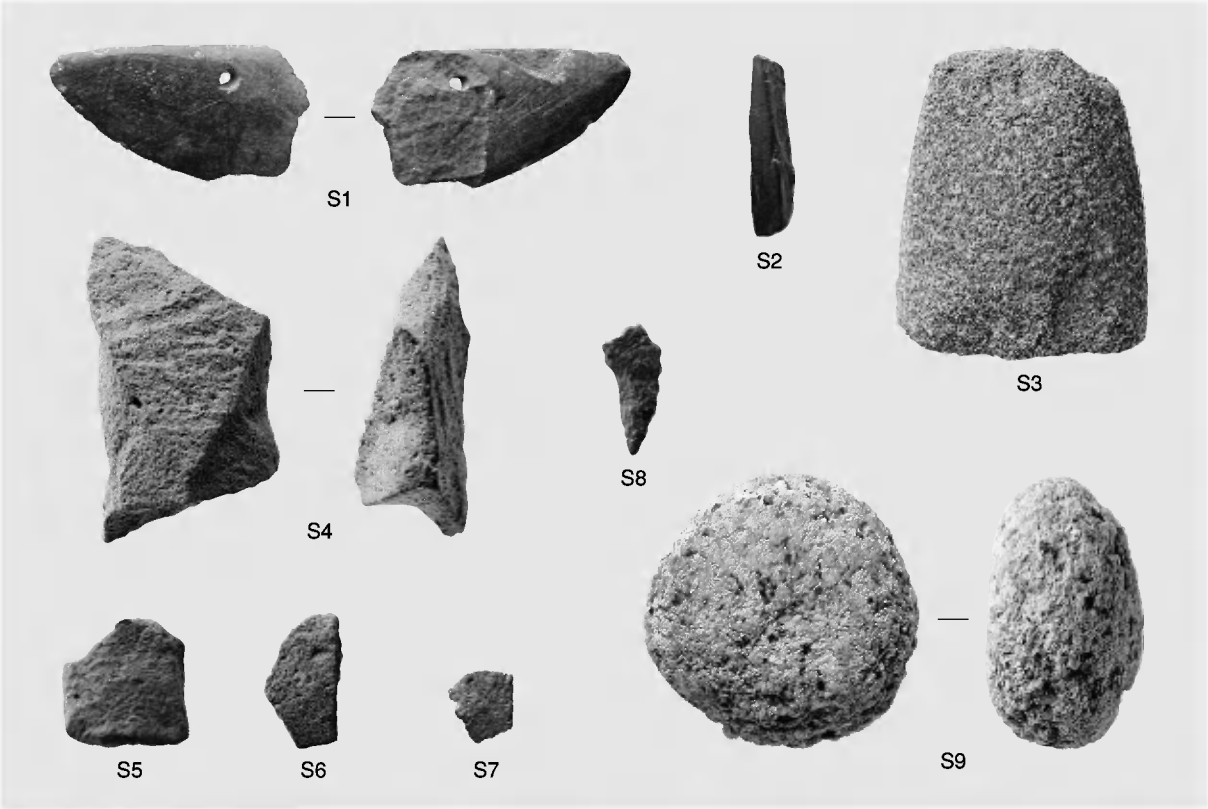
1　土壙 8（南西から）

2　土壙 9（南から）

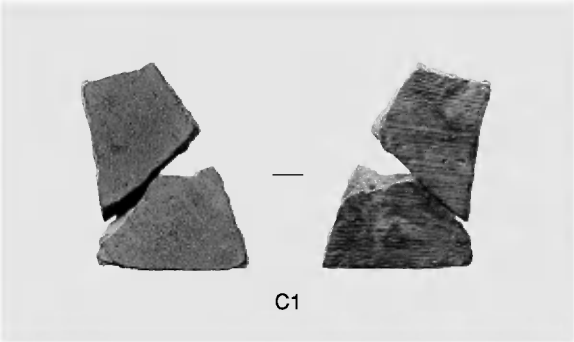
3　土壙10（北西から）



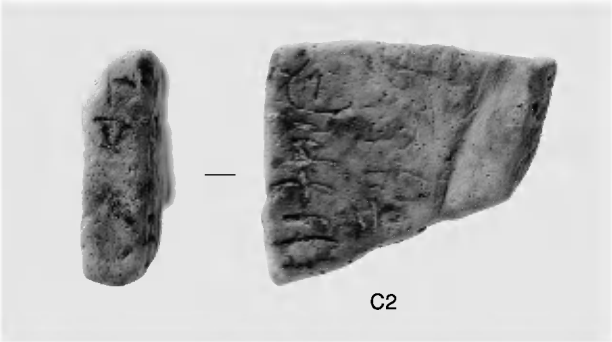
1　竪穴住居 出土土器



2　石器

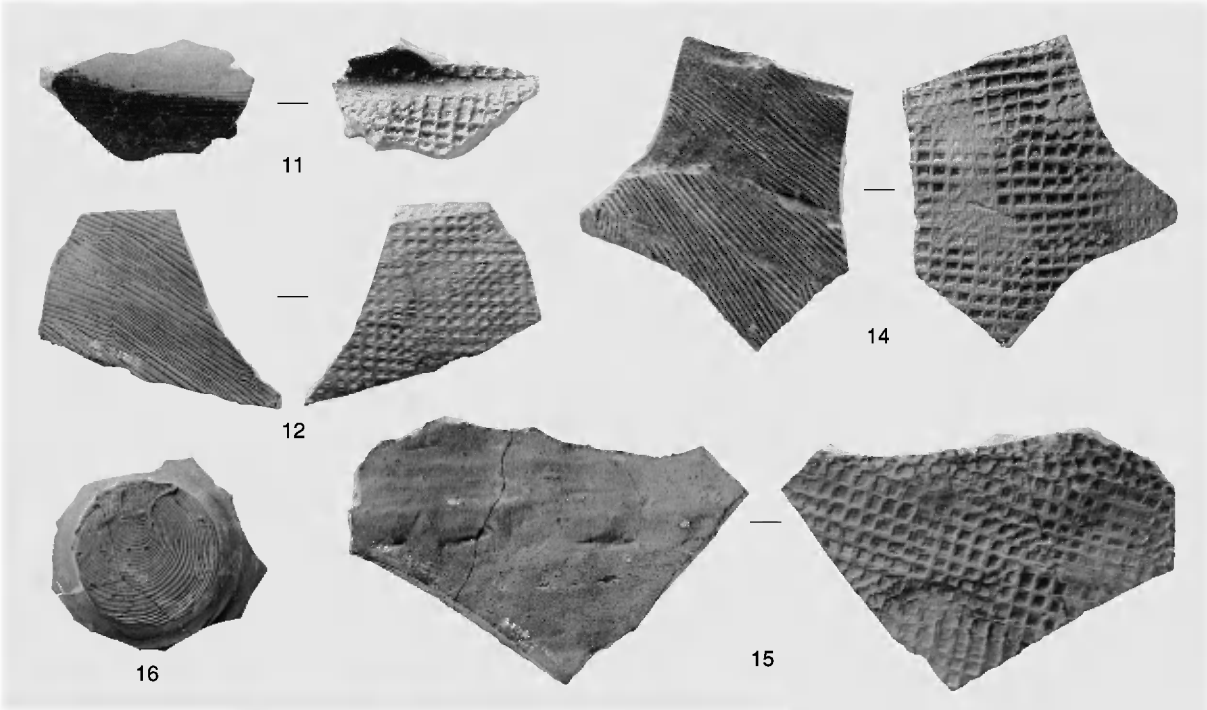


3　転用砥石

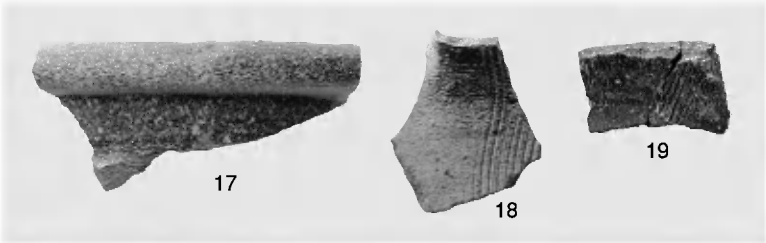


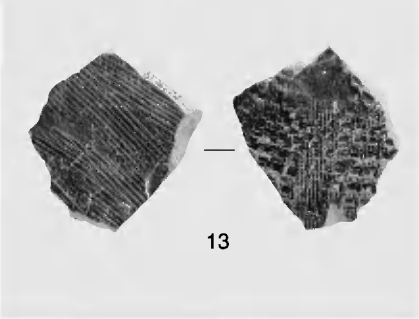
4　瓦経

図版 8

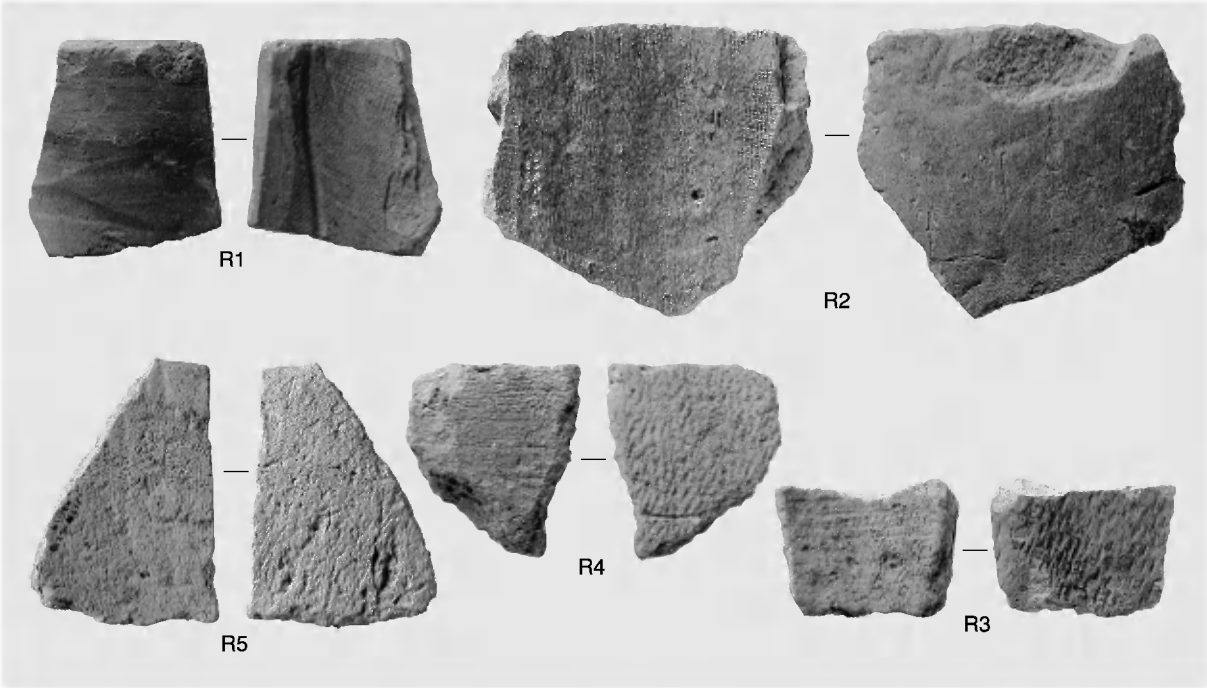


1　勝間田焼





2　備前焼



3　瓦

報告書抄録

ふ り が な	たいちごいけいせき
書　　名	田井ちご池遺跡
副　書　名	勝央調整池築造工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻　　次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	185
編 著 者 名	物部茂樹
編 集 機 関	岡山県古代吉備文化財センター
所　在　地	〒701-0136　岡山県岡山市西花尻1325-3　　ＴＥＬ 086-293-3211
発 行 機 関	岡山県広域水道企業団 岡山県教育委員会
所　在　地	〒709-0604　岡山県岡山市寺山650　　ＴＥＬ 086-297-9800 〒700-8570　岡山県岡山市内山下２－４－６　　ＴＥＬ 086-224-2111
発行年月日	西暦2004年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
田井ちご池 遺跡	岡山県 勝田郡 勝央町 田井	33622		35° 2′ 45″	134° 8′ 40″	20031104～ 20031226	1,578㎡	勝央調整池 築造工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田井ちご池 遺跡	狩猟場 集落	縄文時代	土壙		縄文時代の落し穴 弥生時代後期の山上集落 間山高福寺関連遺物
		弥生時代	竪穴住居	弥生土器・石器	
		古代～ 中世	包含層	勝間田焼・備前焼・ 瓦・瓦経	

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告185

田井ちご池遺跡

勝央調整池築造工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査

平成16年３月25日　印刷
平成16年３月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325－３
発　行　岡山県広域水道企業団
岡山市寺山650
岡山県教育委員会
岡山市内山下２－４－６
印　刷　山陽印刷株式会社
岡山市富吉3098－１